『共産党宣言』初刷の確定[1]

——23ページ本の種々の刷——

橋　本　直　樹

目　次

はじめに
Ⅰ　23ページ本各印刷異本の相違を識別する指標
　1．表紙の相違－飾り枠の意匠が異なる三様の表紙－
　2．扉の相違－4行目と6行目の罫線の有無－
　3．本文の相違－際立つ三つの誤植－
Ⅱ　印刷順序の想定－識別指標を手がかりに－
　1．表紙と二つの折りで構成される23ページ本
　2．同一の組版である証拠
　3．第2折り17ページのノンブルの誤植23はなぜ生じたのか
　4．第1折り6ページ最終行の誤植 heraus beschwor が生じたのはなぜか
　5．印刷順の想定－本文の2つの誤植・表紙意匠・扉の罫線の有無を手がかりに－
Ⅲ　表紙および扉の意匠の相違は何を意味するのか
　1．表紙1は二つの罫線の位置と長さを基準に少なくとも3種にさらに細分できる
　2．異本6の表紙も少なくとも2種ある？
　3．異本2と異本3との関係－18ページ33行目行頭のクワタ痕－
　4．表紙および扉における意匠の相違はなぜ生じたのか－刷の相違を示す目印－
おわりに

---

[1] 欧文タイトル：Zur 23seitigen Ausgabe des „Manifestes der Kommunistischen Partei". 本稿は，Meiser, Wolfgang: Das „Manifest der Kommunistischen Partei" vom Februar 1848. Neue Forschungsergebnisse zur Druckgeschichte und Überlieferung. In: *Marx-Engels-Jahrbuch*, 13, Berlin 1991, S. 117–129の拙訳，ヴォルフガング・マイザー「1848年2月の『共産党宣言』——印刷の経緯と伝承についての新たな研究成果——」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第37号，八朔社，2002年2月，3～15ページ（本論文を，以下ではマイザー『年報』論文と呼び，Meiser 1991と略記する）に付した「訳者補足」（同誌，15～24ページ）を増補改稿したものである。前稿は，本来，マイザー説の理解に資するための文字どおり「補足」であったが，従来説との関連等にも若干言及し，また私見をも多少加えて，大幅に増補改稿を試みることとした。なお，その一部は，「東北社会思想史研究会2003年度夏季例会」（2003年8月8～10日）において報告したが，そのさい質疑して下さった方々に謝意を表する。

はじめに

『共産党宣言』の初版とされるのは「23ページ本」であって[2]，原刊本に限定すれば現在のところ７種の印刷異本［印刷ヴァリエーション］(Druckvariante）の伝承が知られている[3]。それらの印刷順はこの10年程の間の研究によって大筋明らかとされてきている。ことに初刷――少なくとも現伝承原刊本のうち最初に印刷されたもの――は，ノンブルが本来17とされるべき箇所に23と打たれた刊本であろうことが推定されている[4]。とはいえ，従来の見解は異本１から異本４までの表紙を同一のものと理解しているため[5]，異本１については誤植がすぐに訂正され，一定の部数が印刷された一つの刷をなさないのではないかという可能性が生じてくるのであって，いわゆる初刷としての確度の高い推定はまだなされていないと言えよう。もちろん印刷所が小規模で劣悪な印刷機器しかもたなかったために，印刷の途中で版盤が崩れ種々の誤植

---

[2] 初版が「30ページ本」ならびに「ヒルシュフェルト版」でないことについての立ち入った考察は別稿で予定している。さしあたり，トーマス・クチンスキー「初版についての興味深い情報――『共産党宣言』出版140周年に寄せて――」への拙「訳者解説」(『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第37号，25～30ページ）を参照。また，Meiser, Wolfgang: Das *Manifest der Kommunistischen Partei* vom Februar 1848: Zur Entstehung und Überlieferung der ersten Ausgaben. In: *MEGA-Studien*, 1996/1, S. 66–107（拙訳『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第41号，八朔社，2003年12月，3～46ページ。本論文を，以下ではマイザー『研究』論文と呼び，Meiser 1996と略記する）をも参照。

[3] Vgl. Meiser 1991; Kuczynski, Thomas: Editionsbericht. In: *Das Kommunistische Manifest, Schriften aus dem Karl-Marx-Haus Trier* 49, Trier 1995（本書を以下では Kuczynski 1995と略記する）.

なお，本稿では原刊本の伝承が確認されている版本にのみ限定して扱う。フォトコピーないしはファクシミリから別の印刷異本の存在した可能性があるという論点については，さしあたり拙稿「『共産党宣言』23ページ本の表紙・各ページの複製について」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第42号（八朔社，2004年6月）を参照されたい。

また，Druckvariante を「印刷異本」［以下，本稿ではもっぱら異本とのみ略記する］とし，さしあたりは Druck を刷と訳さない事情については，次注を参照されたい。

[4] 本稿で刷という言葉を用いる意図の一部をあらかじめ明らかにしておきたい。

今ではもう大変に珍しくなってしまったが，活版印刷において初版といい初刷という場合，わが国では一般につぎのような理解が前提されている。活字本であるから，活字を植字して組版をつくる。これをもとに紙型をとる。ここまでの過程で，組版と，したがって紙型とが同じであれば，同じ版ということになる。最初の組版とそこから得られた紙型から初版ができる。実際の刷版になるのはこの紙型を雌型にして作成された鉛版であって，それが印刷機に組み付けられる。この鉛版が同じであれば同じ刷ということになる。最初の鉛版からの印刷であれば，それが初版初刷ということになる。紙型から鉛版をとる度ごとに刷数は増えて，順次，初版再刷（第２刷），初版第３刷となる。鉛版をとる都度，紙型は縮み痛んで摩滅する。そこで新たに活字が組まれ，再版（第２版）が用意されるわけである。このように組版ないしは紙型が版の基準であり，鉛版が刷の基準であるならば，初版，初刷の規定は明確である。

ところが，本稿で扱う『共産党宣言』は150年以上も前の仮綴じ本であり，刊行された1848年当時，その印刷は，クリームあるいはマイザーによれば原版刷りでなされたものと想定されている。活字を組んだ組版を刷版として直接印刷機に組み付け，これに印刷用紙を当てて印刷するやり方であり，その後も数千部程度の部数の少ない場合に採られた方法である。紙型をとり鉛版をつくるという印刷ではないから，そもそも技術的にいわゆる刷の違いを論じることが可能なのかという問題が生じる。

本稿で初刷と言う場合，先述のとおり，まず23ページ本中でいち早く印刷された種類の刊本を想定しているが，さらにそれだけに止まらず，各印刷異本が生じた背景を想定し，それら各々の印刷を刷と考えている。その詳細については行論の進むにつれて明らかとなるであろう。

なお，本稿における印刷用語については，わが国における木版と活版との歴史的相違，横組縦組・左開き右開き等の欧日間の相違，また筆者の不案内等により，不適切なものが残存していることを怖れている。お気付きの点は巨細にかかわらずご教示，ご批判頂ければ幸甚である。

[5] マイザー『年報』論文への拙「訳者補足」末尾の「「23ページ本」異本対照表」（前掲誌24ページ）参照。

が生じた[6]といった可能性はほとんど想定し得なくなったのであるが，一つの刷をなすか否かを判断する場合に重要となる上掲誤植を有する刊本（初刷）単独の印刷部数については詳らかにされていない[7]。

本稿が目的とするところは，それら最近の研究を紹介・検討するとともに，現在原刊本３点が伝承されている上記ノンブル誤植刊本が一定の部数をもって出版された初刷であることを，さらに確度高く推定してみようとするところにある。

だが，それも暫定的であることは免れない。というのも，現在のところ原刊本の悉皆調査は望むべくもなく，また検討の手法としても原刊本のこれまでの所有者・所蔵機関について伝承面からのいっそうの追跡が必要とされるところであるが，この方面についての検討は本稿では断念せざるを得ないからである。

Ⅰ　23ページ本各印刷異本の相違を識別する指標

23ページ本に，扉（タイトルページ＝[1]ページ）で２つ，表紙で３つ，本文で３つ［行方不明刊本を含めれば４つ］の意匠等の違いをはじめて示し，現在の研究の基礎を築いたのはベルト・アンドレアスであった[8]。アンドレアスの書誌以降，さらに種々の刊本の伝承が確認されている。それらは，現在のところ，少なくとも26冊あることが知られている[9]。

各刊本には表紙デザインあるいは本文印刷上の特徴などに種々の相違が見られる。これまでの研究によって着目されているそれらの相違の主なものによれば，表紙を基準にすると３通り，扉では２通り，本文の誤植では４通りの類型のあることが分かる。それらの違いを組み合わせると，初版の印刷異本には，結局，現在までに原刊本が伝承されているものとしては先述のとおり７つの種類のあることが判明する。まず本節では，これらの各刊本にどのような相違が見出され印刷異本として区別されるのか，その分類の基準となる指標を整理して確認する[10]。

１．表紙の相違
―飾り枠の意匠が異なる三様の表紙―

第一は，表紙の相違である。掲げた**図版１**から**図版３**に見られるとおり，三つの異なった意匠が伝承されている[11]。

---

[6] 例えば，Kliem, Manfred: Anmerkungen. In: Karl Marx / Friedrich Engels: *Manifest der Kommunistischen Partei*, Zusammenstellung der Texte, Nachwort und Anmerkung von Manfred Kliem, Leipzig 1976, S. 168.（クリームが解説を改訂したものと思われる本書の第２版－1985年刊（？）－は遺憾ながら未見である）。

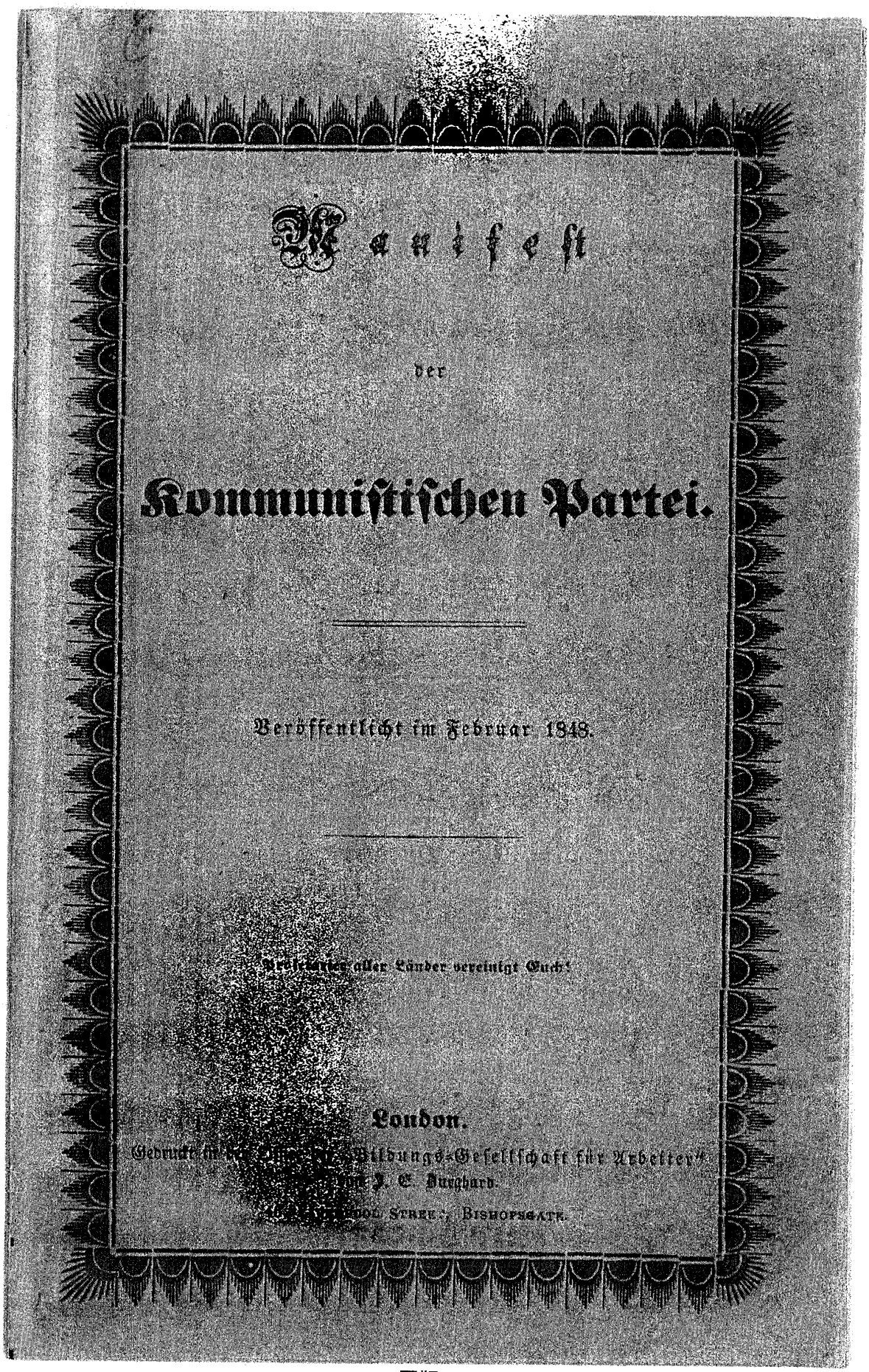
[7] 現在のところ，全体の刷部数についての関心が強いように思われる。

[8] Andréas, Bert: *Le Manifeste Communiste de Marx et Engels. Histoire et Bibliographie 1848-1918*, Milano 1963, pp. 11/12 et pp. 310-315. なお，以下，本稿でアンドレアスの分類記号を示すさいには，煩瑣を避けて，初版23ページ本を意味する数字１は省略し，Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄというようにアルファベット記号のみを記す。

[9] Kuczynski 1995, S. 79.

[10] 本節での整理はもっぱら Meiser 1991によりながらも，適宜 Kuczynski 1995, S. 78-89における記載から補足してある。

[11] すでに服部文男氏が紹介されている。「『共産党宣言』の誕生」『経済』第29号（1998年２月）のうち「一「初版」のいろいろ」を参照（後，同氏『マルクス探索』新日本出版社，1999年に収録された）。なお，各図版の典拠はつぎのとおり。**図版１**：Nachdruck, Karl-Marx-Haus Trier 1998. **図版２**：Meiser, 1991, S. 120 (SAPMO). **図版３**：Reprint, Verlag Neue Gesellschaft, Bonn-Bad Godesberg 1970. 黒滝正昭氏（宮城学院女子大学教授）ご所蔵のものを利用させて頂いた。氏のご厚意に記して謝意を表する。



Das Manifest

der

Kommunistischen Partei.

Veröffentlicht im Februar 1848.

Proletarier aller Länder vereinigt Euch!

London.

Gedruckt in der Office der „Bildungs-Gesellschaft für Arbeiter"
von J. E. Burghard.
[illegible] Street, Bishopsgate.

図版 1

Manifest
der
Kommunistischen Partei.
Veröffentlicht im Februar 1848.
Proletarier aller Länder vereinigt Euch!
London.

図版 2

Manifest

der

Kommunistischen Partei.

Veröffentlicht im Februar 1848.

Proletarier aller Länder vereinigt Euch!

London.

Gedruckt in der Office der „Bildungs-Gesellschaft für Arbeiter"
von J. E. Burghard.

46, Liverpool Street, Bishopsgate.

図版 3

これらの図柄の相違はつぎの諸点にある。

図版１に見られる表紙の類型を「表紙１」と名付ける。表紙１のタイプは，①飾り枠の四隅の角の数が一つであり，②その飾り枠の左下隅内側の線上の先端に点などがなく空白のままで，③矩形に並べられている縁飾りの左右水平の数が16個あり，④上下垂直の数が29個で[12]，⑤その左右水平の縁飾りの左下から４番目のヤクモノに白点がある。

図版２の表紙を「表紙２」と呼ぶ。この表紙２の特徴は，表紙１と比べて②，④および⑤でのつぎのような相違である。②飾り枠の左下隅内側の線上の先端に黒い点が認められ，④矩形に並べられている縁飾りの上下垂直の数が30個で，⑤その左右水平の縁飾りの左上から３番目のヤクモノに白点がある。

図版３の表紙の形を「表紙３」と呼ぶ。この表紙３のデザインは，①飾り枠の四隅の形が前二者とはまったく異なっており，その角の数が三つ，したがって先の二種の表紙で見た②のようなそれぞれの特徴をそもそも見ることはなく，③と④を一応確認すれば，矩形に並べられている縁飾りの数は自ずと減り，左右水平が13個，上下垂直が26個であって，⑤左右水平の縁飾りの左下から２番目のヤクモノのなかのこれまでとはまた異なる位置に白点が見られる。

これら表紙に見出される諸特徴①から⑤までのうち，分類の重要な指標をなすのは①と④とであり，②・③・⑤は付随的なものと見てよい。

２．扉の相違－４行目と６行目の罫線の有無－

第二の相違は扉（タイトルページ＝[1] ページ）における罫線の有無である。扉の４行目と６行目に，⑥表題と刊年月とを区切る双柱ケイ（二重線）ならびに刊年月と刊地とを区切る表ケイ（１本線）いずれをも備えているもの（**図版４**）と，そのような区切りの線いずれをももたないもの（**図版５**）と二つの種類の刊本が伝承されている[13]。

ちなみに，上に見た表紙１および表紙２をもつ，伝承されている刊本すべての扉には，これらの区切り線が見出されるのに対して，表紙３をもつ刊本にはここで確認したように両罫線のあるものとないものとがともに存在するのである。

３．本文の相違－際立つ三つの誤植－

第三は，本文の「誤植」である。もっとも明瞭な指標となるのはつぎの３点である。

まず，⑦第６ページの最終行，53行目にある **herauf beschwor.** という二語に関わるものである。両語のうち **herauf** が **heraus** と誤植されているもの（**図版６**）と，確かに正しく **herauf** と植字されてはいるものの，**herauf** の語末の **f** の字の下半分が左に流れ，また続く **beschwor** の **bes** の各文字のやはり下半分が少し欠けている――いわゆる悪活字になっている――もの（**図版７**）と，二通りある[14]。

つぎに，⑧17ページのノンブルが17と正しく打たれているもの（**図版８**）と，17ではなく，

---

[12] アンドレアスがこの指標を看過していたことについては，**Andréas**, *ibid.*, p. 311および **Meiser** 1991, Anm. 30を参照。

[13] **図版４**：**Nachdruck, Dietz Verlag, Berlin** 1965．**図版５**：**Reprint, Bonn-Bad Godesberg** 1970．なお，これらのリプリントの扉のページは，復刻作成の過程で生じたものか，表題の活字の大きさを基準に見てみると多少寸法が縮小・拡大しているように思われる。そのため，図版５は復刻版を0.98倍して掲げてある。

[14] **図版６**：**Nachdruck, Berlin** 1965．**図版７**：**Nachdruck, Verlag J.H.W.Dietz Nachf. GmbH, Hannover** 1966.

Manifest

der

Kommunistischen Partei.

Veröffentlicht im Februar 1848.

London.
Gedruckt in der Office der „Bildungs-Gesellschaft für Arbeiter"
von J. E. Burghard.
46, Liverpool Street, Bishopsgate.

図版 4

『共産党宣言』初刷の確定

Manifest

der

Kommunistischen Partei

Veröffentlicht im Februar 1848.

London.

Gedruckt in der Office der „Bildungs-Gesellschaft für Arbeiter"
von J. E. Burghard.
46 Liverpool Street, Bishopsgate.

図版5

6

der Nationen von einander. Und wie in der materiellen, so auch in der geistigen Produktion. Die geistigen Erzeugnisse der einzelnen Nationen werden Gemeingut. Die nationale Einseitigkeit und Beschränktheit wird mehr und mehr unmöglich, und aus den vielen nationalen und lokalen Literaturen bildet sich eine Weltliteratur.

Die Bourgeoisie reißt durch die rasche Verbesserung aller Produktions-Instrumente, durch die unendlich erleichterten Kommunikationen alle, auch die barbarischsten Nationen in die Civilisation. Die wohlfeilen Preise ihrer Waaren sind die schwere Artillerie, mit der sie alle chinesischen Mauern in den Grund schießt, mit der sie den hartnäckigsten Fremdenhaß der Barbaren zur Kapitulation zwingt. Sie zwingt alle Nationen die Produktionsweise der Bourgeoisie sich anzueignen, wenn sie nicht zu Grunde gehen wollen; sie zwingt sie die sogenannte Civilisation bei sich selst einzuführen, d. h. Bourgeois zu werden. Mit einem Wort, sie schafft sich eine Welt nach ihrem eigenen Bilde.

Die Bourgeoisie hat das Land der Herrschaft der Stadt unterworfen. Sie hat enorme Städte geschaffen, sie hat die Zahl der städtischen Bevölkerung gegenüber der ländlichen in hohem Grade vermehrt, und so einen bedeutenden Theil der Bevölkerung dem Idiotismus des Landlebens entrissen. Wie sie das Land von der Stadt, hat sie die barbarischen und halbbarbarischen Länder von den civilisirten, die Bauernvölker von den Bourgeoisvölkern, den Orient vom Occident abhängig gemacht.

Die Bourgeoisie hebt mehr und mehr die Zersplitterung der Produktionsmittel, des Besitzes und der Bevölkerung auf. Sie hat die Bevölkerung agglomerirt, die Produktionsmittel centralisirt und das Eigenthum in wenigen Händen koncentrirt. Die nothwendige Folge hiervon war die politische Centralisation. Unabhängige, fast nur verbündete Provinzen mit verschiedenen Interessen, Gesetzen, Regierungen und Zöllen wurden zusammengedrängt in Eine Nation, Eine Regierung, Ein Gesetz, Ein nationales Klasseninteresse, Eine Douanenlinie.

Die Bourgeoisie hat in ihrer kaum hundertjährigen Klassenherrschaft massenhaftere und kolossalere Produktionskräfte geschaffen als alle vergangenen Generationen zusammen. Unterjochung der Naturkräfte, Maschinerie, Anwendung der Chemie auf Industrie und Ackerbau, Dampfschiffahrt, Eisenbahnen, elektrische Telegraphen, Urbarmachung ganzer Welttheile, Schiffbarmachung der Flüsse, ganze aus dem Boden hervorgestampfte Bevölkerungen—welch früheres Jahrhundert ahnte, daß solche Produktionskräfte im Schooß der gesellschaftlichen Arbeit schlummerten.

Wir haben aber gesehen: Die Produktions- und Verkehrsmittel, auf deren Grundlage sich die Bourgeoisie heranbildete, wurden in der feudalen Gesellschaft erzeugt. Auf einer gewissen Stufe der Entwicklung dieser Produktions- und Verkehrsmittel entsprachen die Verhältnisse, worin die feudale Gesellschaft producirte und austauschte, die feudale Organisation der Agrikultur und Manufaktur, mit einem Wort die feudalen Eigenthums-Verhältnisse den schon entwickelten Produktivkräften nicht mehr. Sie hemmten die Produktion statt sie zu fördern. Sie verwandelten sich in eben so viele Fesseln. Sie mußten gesprengt werden, sie wurden gesprengt.

An ihre Stelle trat die freie Konkurrenz mit der ihr angemessenen gesellschaftlichen und politischen Konstitution, mit der ökonomischen und politischen Herrschaft der Bourgeois-Klasse.

Unter unsren Augen geht eine ähnliche Bewegung vor. Die bürgerlichen Produktions- und Verkehrs-Verhältnisse, die bürgerlichen Eigenthums-Verhältnisse, die moderne bürgerliche Gesellschaft, die so gewaltige Produktions- und Verkehrsmittel hervorgezaubert hat, gleicht dem Hexenmeister, der die unterirdischen Gewalten nicht mehr zu beherrschen vermag, die er herauf beschwor.

図版 6

der Nationen von einander. Und wie in der materiellen, so auch in der geistigen Produktion. Die geistigen Erzeugnisse der einzelnen Nationen werden Gemeingut. Die nationale Einseitigkeit und Beschränktheit wird mehr und mehr unmöglich, und aus den vielen nationalen und lokalen Literaturen bildet sich eine Weltliteratur.

Die Bourgeoisie reißt durch die rasche Verbesserung aller Produktions-Instrumente, durch die unendlich erleichterten Kommunikationen alle, auch die barbarischsten Nationen in die Civilisation. Die wohlfeilen Preise ihrer Waaren sind die schwere Artillerie, mit der sie alle chinesischen Mauern in den Grund schießt, mit der sie den hartnäckigsten Fremdenhaß der Barbaren zur Kapitulation zwingt. Sie zwingt alle Nationen die Produktionsweise der Bourgeoisie sich anzueignen, wenn sie nicht zu Grunde gehen wollen; sie zwingt sie die sogenannte Civilisation bei sich selst einzuführen, d. h. Bourgeois zu werden. Mit einem Wort, sie schafft sich eine Welt nach ihrem eigenen Bilde.

Die Bourgeoisie hat das Land der Herrschaft der Stadt unterworfen. Sie hat enorme Städte geschaffen, sie hat die Zahl der städtischen Bevölkerung gegenüber der ländlichen in hohem Grade vermehrt, und so einen bedeutenden Theil der Bevölkerung dem Idiotismus des Landlebens entrissen. Wie sie das Land von der Stadt, hat sie die barbarischen und halbbarbarischen Länder von den civilisirten, die Bauernvölker von den Bourgeoisvölkern, den Orient vom Occident abhängig gemacht.

Die Bourgeoisie hebt mehr und mehr die Zersplitterung der Produktionsmittel, des Besitzes und der Bevölkerung auf. Sie hat die Bevölkerung agglomerirt, die Produktionsmittel centralisirt und das Eigenthum in wenigen Händen koncentrirt. Die nothwendige Folge hiervon war die politische Centralisation. Unabhängige, fast nur verbündete Provinzen mit verschiedenen Interessen, Gesetzen, Regierungen und Zöllen wurden zusammengedrängt in Eine Nation, Eine Regierung, Ein Gesetz, Ein nationales Klasseninteresse, Eine Douanenlinie.

Die Bourgeoisie hat in ihrer kaum hundertjährigen Klassenherrschaft massenhaftere und kolossalere Produktionskräfte geschaffen als alle vergangenen Generationen zusammen. Unterjochung der Naturkräfte, Maschinerie, Anwendung der Chemie auf Industrie und Ackerbau, Dampfschiffahrt, Eisenbahnen, elektrische Telegraphen, Urbarmachung ganzer Welttheile, Schiffbarmachung der Flüsse, ganze aus dem Boden hervorgestampfte Bevölkerungen—welch früheres Jahrhundert ahnte, daß solche Produktionskräfte im Schooß der gesellschaftlichen Arbeit schlummerten.

Wir haben aber gesehen: Die Produktions- und Verkehrsmittel, auf deren Grundlage sich die Bourgeoisie heranbildete, wurden in der feudalen Gesellschaft erzeugt. Auf einer gewissen Stufe der Entwicklung dieser Produktions- und Verkehrsmittel entsprachen die Verhältnisse, worin die feudale Gesellschaft producirte und austauschte, die feudale Organisation der Agrikultur und Manufaktur, mit einem Wort die feudalen Eigenthums-Verhältnisse den schon entwickelten Produktivkräften nicht mehr. Sie hemmten die Produktion statt sie zu fördern. Sie verwandelten sich in eben so viele Fesseln. Sie mußten gesprengt werden, sie wurden gesprengt.

An ihre Stelle trat die freie Konkurrenz mit der ihr angemessenen gesellschaftlichen und politischen Konstitution, mit der ökonomischen und politischen Herrschaft der Bourgeois-Klasse.

Unter unsren Augen geht eine ähnliche Bewegung vor. Die bürgerlichen Produktions- und Verkehrs-Verhältnisse, die bürgerlichen Eigenthums-Verhältnisse, die moderne bürgerliche Gesellschaft, die so gewaltige Produktions- und Verkehrsmittel hervorgezaubert hat, gleicht dem Hexenmeister, der die unterirdischen Gewalten nicht mehr zu beherrschen vermag, die er herauf beschwor.

誤って23と打たれているもの（図版９）と，やはり二通りある[15]。

最後に，特徴的な本文の相違は，⑨18ページの第33行目の行頭で，Zunftwesen in der Manufaktur と始められている箇所にある。ここは前の第32行目の行末で前段落が終了し，改行されたのを承けて，新たな段落の初めであることを示すため，行頭を２～３文字分ほどの空白部（いわゆる字下がり）とする箇所である。この空所の部分は，植字にさいして印刷には現れないいわゆる込め物を充てる。スペースの幅としては日本の活字の全角相当であり，クワタ（Quadrat）が用いられる。そこが正しくそのまま空白になっているものと，空白となるべきその場所で，この全角クワタが，溝やネッキでの落ち着きが悪いなどして，浮き上がって印刷されてしまい，■形の印刷上の汚れをもつもの[16]と，二通りあるというのである。

そして，これら３つの指標で見ると，現在伝承されている刊本の本文には四通りの類型のあることが分かるわけである。

以上，表紙・扉・本文のそれぞれの相違がどのような組み合わせとなって七つの種類となるのかを，言葉で説明する煩瑣を避けて表示すれば，26ページに見られる〔23ページ本印刷異本対照表（その１）〕のとおりである。

Ⅱ　印刷順序の想定
ー識別指標を手がかりにー

では，これら７種類の刊本の印刷はどのような順序で行われたのであろうか。

〔23ページ本印刷異本対照表（その１）〕に記載したとおり，マイザーおよびクチンスキーは各異本に番号ないし記号を与えることによってそれぞれの想定する印刷順序を示しているものと思われる。とはいえ，両人にあっては実際にそのような順序がなぜ成り立つのかについての立ち入った説明は行われていない。ここでは彼らの立論の背景に窺えるそうした印刷順序についての根拠を整理しておきたい。

そのさいに前提的な知識として求められる23ページ本の所見のあらましを，まず，確認しよう[17]。

---

[15] 図版８：Nachdruck, Hannover 1966. 図版９：口絵写真２『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第37号。

[16] 遺憾ながら，筆者はこの刊本は未見，またそのコピー等も未入手である。

[17] 筆者がこれまで実際に検分する機会に恵まれたのは，以下の９点の原刊本である（所蔵施設，所在地ならびにマイザー，クチンスキーそれぞれの分類番号・記号を付記して示す）。９点目は筆者がその所在を突き止めたもの。

１）アムステルダム大学大学図書館，アムステルダム（Meiser: Druckvariante 1, Kuczynski: Druckvariante A1a）

２）バーゼル大学開放図書館，バーゼル（Meiser: Druckvariante 1, Kuczynski: Druckvariante A1b）

３）社会史国際研究所（IISG），アムステルダム（Meiser: Druckvariante 3, Kuczynski: Druckvariante A3a）

４）社会史国際研究所，アムステルダム（Meiser: Druckvariante 4, Kuczynski: Druckvariante B4a）

５）連邦文書館内ドイツ民主共和国諸党および大衆諸組織文書館（SAPMO），ベルリン［旧社会主義統一党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所図書館］（Meiser: Druckvariante 5, Kuczynski: Druckvariante B5a）

６）ロシア国立社会政治史文書館（РГАСПИ），モスクワ［前現代史諸文書保管＝研究ロシアセンター（RC），旧マルクス・エンゲルス博物館図書館］（Kuczynski: Druckvariante B6b）

Es kann dies natürlich zunächst nur geschehen vermittelst despotischer Eingriffe in das Eigenthumsrecht und in die bürgerlichen Produktions-Verhältnisse, durch Maaßregeln also, die ökonomisch unzureichend und unhaltbar erscheinen, die aber im Lauf der Bewegung über sich selbst hinaus treiben und als Mittel zur Umwälzung der ganzen Produktionsweise unvermeidlich sind.

Diese Maaßregeln werden natürlich je nach den verschiedenen Ländern verschieden sein.

Für die fortgeschrittensten Länder werden jedoch die folgenden ziemlich allgemein in Anwendung kommen können:

1) Expropriation des Grundeigenthums und Verwendung der Grundrente zu Staatsausgaben.
2) Starke Progressiv-Steuer.
3) Abschaffung des Erbrechts.
4) Konfiskation des Eigenthums aller Emigranten und Rebellen.
5) Centralisation des Kredits in den Händen des Staats durch eine Nationalbank mit Staatskapital und ausschließlichem Monopol.

literarische Kampf blieb ihr übrig. Aber auch auf dem Gebiete der Literatur waren die alten Redensarten der Restaurationszeit unmöglich geworden. Um Sympathie zu erregen, mußte die Aristokratie scheinbar ihre Interessen aus den Augen verlieren und nur noch im Interesse der exploitirten Arbeiterklasse ihren Anklageakt gegen die Bourgeoisie formuliren. Sie bereitete sich so die Genugthuung vor, Schmähglieder auf ihren neuen Herrscher singen und mehr oder minder unheilschwangere Prophezeihungen ihm in's Ohr raunen zu dürfen.

Auf diese Art entstand der feudalistische Socialismus, halb Klagelied, halb Pasquill, halb Rückhall der Vergangenheit, halb Dräuen der Zukunft, mitunter die Bourgeoisie in's Herz treffend durch bittres, geistreich zerreißendes Urtheil, stets komisch wirkend durch gänzliche Unfähigkeit den Gang der modernen Geschichte zu begreifen.

Den proletarischen Bettlersack schwenkten sie als Fahne in der Hand, um das Volk hinter sich her zu versammeln. So oft es ihnen aber folgte, erblickte es auf ihrem Hintern die alten feudalen Wappen und verlief sich mit lautem und unehrerbietigem Gelächter.

16

Es kann dies natürlich zunächst nur geschehen vermittelst despotischer Eingriffe in das Eigenthumsrecht und in die bürgerlichen Produktions-Verhältnisse, durch Maaßregeln also, die ökonomisch unzureichend und unhaltbar erscheinen, die aber im Lauf der Bewegung über sich selbst hinaus treiben und als Mittel zur Umwälzung der ganzen Produktionsweise unvermeidlich sind.

Diese Maaßregeln werden natürlich je nach den verschiedenen Ländern verschieden sein.

Für die fortgeschrittensten Länder werden jedoch die folgenden ziemlich allgemein in Anwendung kommen können:

1) Expropriation des Grundeigenthums und Verwendung der Grundrente zu Staatsausgaben.
2) Starke Progressiv-Steuer.
3) Abschaffung des Erbrechts.
4) Konfiskation des Eigenthums aller Emigranten und Rebellen.
5) Centralisation des Kredits in den Händen des Staats durch eine Nationalbank mit Staatskapital und ausschließlichem Monopol.

literarische Kampf blieb ihr übrig. Aber auch auf dem Gebiete der Literatur waren die alten Redensarten der Restaurationszeit unmöglich geworden. Um Sympathie zu erregen, mußte die Aristokratie scheinbar ihre Interessen aus den Augen verlieren und nur noch im Interesse der exploitirten Arbeiterklasse ihren Anklageakt gegen die Bourgeoisie formuliren. Sie bereitete sich so die Genugthuung vor, Schmähglieder auf ihren neuen Herrscher singen und mehr oder minder unheilschwangere Prophezeihungen ihm in's Ohr raunen zu dürfen.

Auf diese Art entstand der feudalistische Socialismus, halb Klagelied, halb Pasquill, halb Rückhall der Vergangenheit, halb Dräuen der Zukunft, mitunter die Bourgeoisie in's Herz treffend durch bittres, geistreich zerreißendes Urtheil, stets komisch wirkend durch gänzliche Unfähigkeit den Gang der modernen Geschichte zu begreifen.

Den proletarischen Bettlersack schwenkten sie als Fahne in der Hand, um das Volk hinter sich her zu versammeln. So oft es ihnen aber folgte, erblickte es auf ihrem Hintern die alten feudalen Wappen und verlief sich mit lautem und unehrerbietigem Gelächter.

(上)：図版 8，(下)：図版 9

識別指標	従来の分類	異本1	異本2	異本3	異本4	異本5	異本6	異本7	類型数	
	Andréas の分類	C	B	B	A	A	A	A	部分	全体
	Meiser の分類	1	2	3	4	5	6	7		
	Kuczynski の分類	A 1	A 2	A 3	B 4	B 5	B 6	C 7		
①	表紙　飾り枠隅の角数	1	1	1	1	1	3	3	2	5～6
②	左下隅端点	無し	無し	無し	無し	有り	無し	無し	2	
③	縁飾り数水平	16	16	16	16	16	13	13	2	
④	垂直	29	29	29	29	30	26	26	3	
⑤	白点の場所	水平下左から4	無し	水平下左から4	水平下左から4	水平上左から3	水平下左から1	水平下左から1	3～4	
⑥	扉　罫線の有無	有り	有り	有り	有り	有り	有り	無し	2	3
⑦	本文　S. 6, Z.53 heraus	無し，但し損傷	無し，但し損傷	無し，但し損傷	有り	有り	有り	有り	2	
⑧	S.17→S.23	有り	無し	無し	無し	無し	無し	無し	2	3
⑨	S.18, Z.33■	無し	有り	無し	無し	無し	無し	無し	2	
伝承刊本数26（a＋b＋c＝7）		3	1	1＋(2)	2＋(a)	4＋(b)	4＋(c)	2		7種

＊網掛け部は各印刷異本に特徴的な識別の指標を示す。

23ページ本印刷異本対照表（その1）

1．表紙と二つの折りで構成される23ページ本

23ページ本は表裏とも緑色の用紙を表紙にもち，実際には23ページの裏面に空白の第24ページ目のある，全24ページからなる仮綴じ本である。

表紙はいわゆる第1表紙ページ（表表紙）に標題等の印刷がなされている他は，第2表紙ページ（表紙裏＝見返し）から第4表紙ページ（裏表紙）に至るまで3ページ分にはなんらの印刷の跡もない。寸法は，所蔵機関等が後に切り揃えた可能性を完全に否定することはできないものの，表紙ページで，縦215～216mm，横134～135mmであり，八つ折り版ということになる。

本文用紙は，かなり薄手の，少し和紙のような感じのするしなやかで，表裏の判別しにくい紙種であり，透かしはない。今では酸のためかなり茶色に変色してきている。とはいえ，他の1870～90年代に刊行された『宣言』諸版本と比べればほとんど変色しておらず，大変よい状態を保っている紙質である。しかし，本文用紙は刊本ごとに，伝承状況や保管状態の相違ということもあるのであろうか，多少異なった印象を受けもするのであって，あるいはそうした諸条件の相違とはまた別に，とりわけ刷ごとに使用された印刷用紙の異なる可能性をも考慮に入れておく必要があるのかもしれない。

ページの表裏の関係等から見て，23ページ本の本文はつぎの二つの折りから成っている。

第1折りは，扉（タイトルページ＝［1］ページ）～16ページまでであって，印刷全紙は八つ折り版の通常の版掛け（8ページ本掛け）で印刷されたものと見てよい。

一方，第2折りは17ページから［24］ページまでの全8ページ，つまり通常の半分のページの折りであり，例えば打ち返し等，通常とは異なった版掛けがなされたと見なければならない。ちなみに，ここからノンブルの誤植もこの特殊な版掛けと関係していたと見るマイザーの推定が生まれてくるわけである[18]。

扉の左辺には，製本のための白糸が通っている穴が縦に三つ並んでいる。したがって，本文用紙は，前半の第1折り16ページ分と後半の第2折り8ページ分とを，おそらく前者は16ページまわし折り，後者は例えば8頁長手折り（長方形折り）・クロス折りあるいは8頁巻き折り（平行折り）して，それぞれ折り畳み，出来上がったこの二つの折りを重ね，三つの穴を穿ち，白糸を通し，結わえ付けて仮綴じされている。このように綴じられた1印刷全紙半が，その厚さ2mmに満たない背の部分と第1ページの左辺数mmとをのりしろに用いて，緑色の表紙にしっかりと貼付されている。さらに，三方裁ちないしは折り畳んで袋になったところので

7）ロシア国立社会政治史文書館，モスクワ［前国立社会＝政治図書館（GOPB），旧ソ連共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所図書館］（Meiser: Druckvariante 4(?), Kuczynski: Druckvariante B4-6e）

8）ロシア国立社会政治史文書館，モスクワ［前現代史諸文書保管=研究ロシアセンター（RC），旧ソ連共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所中央党アルヒーフ］（Kuczynski: Druckvariante B4-6f）

9）慶應義塾大学三田メディアセンター貴重書室，東京（クチンスキーの分類にならえばB4-6に属する）

なお，国内外における23ページ本，30ページ本，ヒルシュフェルト版の伝承・所在等について，諸情報をご教示頂ければ大変有り難い限りである。

[18] Meiser1991, S.118 u Anm.15（拙訳6ページ，脚注15）および前掲「訳者補足」21～23ページ。詳細は後論する。

きる2辺が裁ち落とされて，仮綴じ本として仕上げられている。

したがって，『宣言』23ページ本は，誤植等その印刷の特徴を見る場合には，緑色の表紙部分，第1折り部分および第2折り部分という3つの部分の組み合わせとして考慮する必要のあることが分かる[19]。つまり，第Ⅰ節でみた各印刷異本の識別指標はこの3つの部分のそれぞれどこに属するかを見定めたうえで，3者それぞれの組み合わせとして考慮しなければならないのである。この点は，23ページの各印刷異本を把握するさいに非常に重要な点であるが，従来必ずしも明瞭に意識されてこなかっただけに強調しておく必要がある[20]。

2．同一の組版である証拠

つぎに，そもそも同じ組版であって，それを共通に用いた印刷による刷の違いであるということがどのようにして分かるのかについて確認しよう。

そのような確認は，通常，刊本に残る印刷上の汚れでなされる。

例えば，23ページ本の第16ページ32行目の行頭2語は einer andern. とある。einer と andern とを分かつため，両語間に込め物（ここの場合は「スペース」）が配される。印刷面に空白部をつくるためだけなので，込め物は印刷される活字よりも高さを幾分低く，谷の高さ程度につくってあり，本来は印刷インクが付かない。にもかかわらず，先の全角クワタの場合と同じく，スペースの込め物の組版への納まり具合が悪いと，印刷のさいに浮き上がり，本来インクが付くべきではない込め物の上面にインクが付着し，込め物の肩面自体も印刷されてしまうことがある。すると，その縦長の棒状の汚れが，全部あるいは上部ないしは下部の一部分，残されることになる。ここの場合には，einerlandern. あるいは einer'andern. もしくは einer'andern. などとなるわけである。このような印刷上の汚れが，同一の組版であることを証拠立てる典型的な印刷特性として認められている。

伝承されている26の刊本いずれにもこうした汚れがいくつか見出され，それらのうちすべての刊本に共通して認められる7つの箇所が明らかにされている[21]。このような痕跡によって，

---

[19] 詳細は，拙稿「【口絵解題】アムステルダム大学図書館蔵『共産党宣言』23ページ本」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第37号，八朔社，2002年2月，85/86ページおよび巻頭口絵写真参照。

[20] 例えば，アンドレアスは扉，表紙および本文という区分で印刷異本（A, B, C, D）の相違を把握している（Vgl. Andreas, *ibid.*, pp. 310-315）。確かに通常の洋装本の場合には扉にその刊本の特徴がもっともよく現われるわけだが，23ページ本の場合は本文が1印刷全紙半のみの，そのうえ仮綴じ本であるという特性を看過しているのではなかろうか。23ページ本の扉は，別丁貼り込みなどが施されるのではなく，第1折りの第1ページ目で印刷されることになる。したがって，各折りの誤植訂正等の反映は，まずは扉よりもむしろ扉をも含む本文各折りとは別に印刷される表紙に現われると見るべきなのである（詳しくはⅢ4.参照）。マイザーやクチンスキーにおいても，このアンドレアスの枠組みは越えられておらず，改められる必要があると思われる。

[21] 「

ページ	行	前後の語
16	32	anderen
16	39	freie
19	25	gegen
20	5	hier
21	24	ersten
21	49	(sich)
22	7	fehlschlagende」（Kuczynski 1995, S. 80）。

26冊いずれもが同一の組版から印刷された初版の種々の刷であることが確証されるわけである。

では，それら各刊本は互いにどのように相前後しているのであろうか。前節で確認した各指標のいくつかに基づいて見てみよう。

3．第2折り17ページのノンブルの誤植23はなぜ生じたのか

まずノンブルの誤植である。このような一見するところではまことに奇妙な誤植は，いったいどのようにして生じたのであろうか？ 左側の対ページ上部余白中央に16とあるにもかかわらず，23というノンブルがくるのであるからまことに奇異な誤植である。そしてこの誤植が，トーマス・クチンスキーに一時，30ページ本初版仮説を想定させたのであった[22]。現時点から見れば誤った仮説であったとはいえ，クチンスキーの貢献は，ノンブル17の誤植であれば，17以外のどのような数字をとって誤植されてもよいはずなのに，なぜ23という特定の数字となったのか，いわば23という数にならなければならないその一義的必然性を考慮に入れた点である。マイザーは，クチンスキーのこのような創見に依拠して，数字が23でなければならない別のより合理的と思われる説明を与えたのである。つまり，17ページの下部余白中央に目を移すと，そこには2という折り丁番号（Signatur）が見てとれる。したがって，この誤植には組み付け，ことに版の掛け方の問題が関連しているのではないかと想定したのである。

マイザーの想定とはこうである。

「23ページ本の本文は八つ折り判印刷全紙1枚半に配分されており，そのさい第2折りは8ページ分だけとなっている。誤ったページ付けは，第2折り（半印刷全紙分）の最初のページに見出されるが，この折りには2という折り丁番号がある。17ページの印刷枠（Kolumne）から23ページの印刷枠までは明らかに同時に印刷機にのせられ，この折りは両面が印刷された（そうでない場合，19ページ，すなわち裏版（Widerdruck）の最初のページには，完全な折りであったならば，折り丁番号2*が現れたに違いない）。こうして，それぞれ断裁されることによって，第2折り（半印刷全紙分）が2部（Exemplar）出来上がった。クロス［交差］折り（Kreuzfalz）と平行折り（Parallelfalz）とでいったいどちらが用いられたかに応じて，各ページの印刷枠が印刷の版盤に掛けられることになる。すなわち，ページの割り振りのさいに同じ場所に17ページのノンブルか23ページのノンブルかのいずれかが植字されるはずである。同時に，それによって，クチンスキーの仮説の論拠は根底から覆される」[23]。

以下，この点を敷衍しよう。

先に確認したとおり，『共産党宣言』23ページ本の本文は，16ページをなす印刷全紙1枚分16ページ（[1] ページから16ページまで）の第1折りと半印刷全紙分8ページ（17ページから[24] ページまで）の第2折りとで構成されている。通常の印刷では，印刷全紙片面ごとに8ページ（両面16ページ）分を印刷するため，印

[22] Vgl. Kuczynski, Thomas: Interessante Informationen über die Erstausgabe. Zum 140. Jahrestag des Erscheinens des Manifestes der Kommunistischen Partei. In: Probleme des Friedens und des Sozialismus, H. 3 (355), Prag März 1988, 31. Jg., S. 424-426（前掲クチンスキー［拙訳］「初版についての興味深い情報」30～34ページ）.

[23] Meiser 1991, S. 125, Anm. 15（拙訳6ページ，脚注15）.

刷全紙の表裏に対して８ページ本掛けといった版の掛け方（組み付け）をする。ところが，『宣言』の第２折りはその半分の片面４ページ（両面８ページ）分である。この場合，一枚の印刷全紙をあらかじめ半裁して印刷に掛けるのではなく，印刷全紙の表裏に８ページずつを印刷して，二つに裁ち割り，第２折りが一度に２部出来上がる８ページ掛け（打ち返し）といった版の掛け方をすることになる。そのような版の掛け方は，裁ち割り後の紙折りの仕方によって種々であるが，ここでマイザーが例示しているところに従えば，クロス折りと平行折りとである。両者の版掛けを図示すれば91ページの図のようになる（はじめの方がクロス折り，後の方が平行折りを予定したもの）[24]。

（図１）に示した組み付けを用いると（図２）が刷り上がる。（図２）の表裏がどうなっているかを示したのが（図３）である。

また，（図４）に示した組み付けを用いると（図５）が刷り上がる。（図５）の表裏がどうなっているかを示したのが（図６）である。

このように印刷することによって，印刷全紙１枚分を用いて，17ページ以降の半印刷全紙分が一度に二つ印刷される。図１～３の場合は中央の太い縦線を，また図４～６の場合は中央の太い横線を，それぞれの断裁線として二つに裁ち割り，紙折りにさいして前者では８頁長手折りを，後者では８頁巻き折りを行えば，それぞれ第２折りが同時に２組出来上がるわけである。したがって，『共産党宣言』の23ページ本の各刷は，同じ刷であっても，第２折りの17，20，21，24の各ページが印刷用紙の表（したがって18，19，22，23の各ページが印刷用紙の裏）であるものと，逆に，17，20，21，24の各ページが印刷用紙の裏（したがって18，19，22，23の各ページが印刷用紙の表）であるものと，それぞれ２種類あることになる。

そこで，マイザーが強調する点を，上の二つの紙折りの場合で説明すればつぎのようになる。図１と図４とで，組み付けの左下にはそれぞれ23ページ（図１）と17ページ（図４）が来ている。『宣言』の第２折りが仮に８頁巻き折りを予定しており，組み付けは図４が用いられていたとする。ところが，植字工の方では，『宣言』第２折りの紙折りは８頁長手折りで行われ，図１の組み付けであるものと誤認している場合，図４の組み付けで左下にある本来は17のノンブルが植字されるはずであったページの割りふりに23のノンブルが植字されてしまうことになるであろう，というのである。

各異本の印刷順を考える上で重要なのは，23という数字は，クリームの想定するようにたまたまページの周囲で版盤が崩れたために，そこの活字を組み直すさいに生じた偶然的な誤植なのではなくて，大組み（ページ掛け）当初からのノンブルの打ち損じだという点にある。

このように考えれば，この，ノンブル17であるべき箇所に誤植23のノンブルをもつ異本が，まさしく初刷であると理解されるわけである[25]。というのも，ノンブルの誤植であるから，それ

[24] 日本での通常の紙折りの用語では，前者が８頁長手折り（長方形折り）であって，裁ち割り後の半分の大きさの印刷全紙を長辺に平行に１回これにクロス折り１回ということになる。また，後者は８頁巻き折り（平行折り）であって，短辺に平行に２回折ることになる。なお，ここでの版掛けの図示は，和書の通常のものとは各ページの上下が逆転している。実際の版掛けはなお不明であるため，マイザーのページ数の説明の便宜のためのあくまでも例示にすぎない。

[25] つまり，アンドレアスの分類においてＡに先立つＢとＣの印刷順の推定に戻れば，Ｃ→Ｂの順序であると推定することが許されるわけであり，アンドレアスの推定とは逆に，Ｃこそが初刷であると考えてよいことになる。

（図１）第２折りの組版（クロス折り）

23	18	17 2	24
22	19	20	21

（図２）印刷された第２折り（表裏同一）

24	17 2	18	23
21	20	19	22

（図３）印刷された第２折り（表裏の関係）

(23) 24	17 (18) 2	(17) 18 (2)	23 (24)
(22) 21	20 (19)	(20) 19	22 (21)

（　）は裏面に印刷されていることを示す

（図４）第２折りの組版（平行折り）

17 2	24	21	20
18	23	22	19

（図５）印刷された第２折り（表裏同一）

20	21	24	17 2
19	22	23	18

（図６）印刷された第２折り（表裏の関係）

(19) 20	21 (22)	(23) 24	17 (18) 2
(20) 19	22 (21)	(24) 23	(2) 18 (17)

（　）は裏面に印刷されていることを示す

〔版掛け（組み付け）説明図〕

に気付いて訂正がなされるのはもっとも初期の段階と考えることが妥当だからである。

以上の推定に大過ないとすれば，このノンブルの誤植をもつ刊本の第１折りおよびそれを包む表紙も同じく初刷のものと考えてよいことになる。すなわち，表紙について言えば表紙１がそれにあたる。また，第１折りについて見ると，6ページ最終行（第53行）に herauf beschwor と正しく植字されているものが初刷に相当することとなる。

この後者の点は甚だ奇妙なことになる。つまり，初刷では正しく植字されていたものが，その後，どの時点かの刷以降で heraus beschwor と誤植されたということになるからである。果たして，このようなことはあり得るのであろうか。これに対してマイザーは一定の説得力のある解を与えたのであって，それについては項を改めて検討することとしよう。

４．第１折り６ページ最終行の誤植 heraus beschwor が生じたのはなぜか

アンドレアスはＡから先に印刷され，その後

BとCが続いたと推定した。その根拠となったのは，本項で検討しようとする本文の相違についての⑦の基準である。Aが6ページの最終行（第53行）で heraus beschwor. と誤植されているのに対して，BおよびCでは正しく herauf beschwor. となっているからである。

だが，この間のマイザーの検討によって，このようなアンドレアスによる印刷順の推定は誤りである蓋然性が極めて高くなった。

重要な意味をもつのは，正しく印刷されている herauf beschwor. がいずれも前節（Ⅰ3.）で確認したとおりいわゆる悪活字になっているという事実であって，マイザーはそれを指摘したのである[26]。彼の推定はこうである。印刷工は先に見たような悪活字を改めようとして部分的に植字し直した。ところがそのさいにfの字の代わりに誤ってsを植字してしまったというのである。というのは，ドイツ文字の小文字においてはf [f] といわゆる長いs [ſ] とでは字形が極めてよく似通っている。以前に印刷が終了して活字箱に戻される[27]折に長いsが誤ってfの小文字のところに入れられてしまっていた。その後，この誤りが気付かれずにこの箇所にそのまま用いられた。そのため，新たに誤植が発生したというのである。

また，マイザーは，正しく herauf と植字されていてもアンドレアスはそれが悪活字となっている点を看過しており，彼には当然にもこのような点についての考慮の余地は生じ得なかった，と見ている。

従来の印刷順の推定を検討する上でマイザーのこのような指摘が重要なのは，heraus という新たな誤植は，クリームの言うように偶然に版盤の崩れが起こり活字を組み直したために生じたのではなく，herauf と本来正しく植字してはあったものの，それが beschwor の部分も含めて悪活字であることに気付いた印刷工が意識的に訂正したところから生じた誤りだ，という点にある。

したがって，印刷順としては，アンドレアスの推定とは逆のB・C→Aが妥当だという結論になる。もしアンドレアスの推定のようにA→B・Cの順であれば，BやCの版本のなかに herauf beschwor. 前後の悪活字が直されている版本もいくつか伝承されていなければならない。というのは，その前提に立つ場合，せっかく heraus という誤植を直したのに，そこが悪活字であれば，誤植訂正のために注目していた箇所であるだけに，なおのこと新たに生じたその悪活字への改めての補正が入り，綴字が正しく herauf でありかつ悪活字も直されている整った印刷の版本もつくられるものと思われるのである。これに対して，herauf beschwor. 前後の悪活字を直して，heraus と誤った場合には，綴字はすでに herauf と正しいものであっただけに，悪活字さえ直れば新たな綴字の誤植は意想外のことであり，看過されやすくなる可能性がある。また，字面として heraus という別の語もあるだけになおのこと看過されやすくなる。

したがって，ここでの誤植を基準に見れば，

---

[26] Meiser 1991, S. 119/120（拙訳，7ページ）.

[27] その後の活版印刷においては，いったん使用した活字を活字箱に戻すというようなことはせず，まとめて鋳溶かして，新たに活字を鋳造するやり方が一般的である。しかし，当時のロンドンの労働者教育協会の事情は，英語圏の首都に位置していたことなどから，その都度ドイツ文字の活字を大陸から購入する必要があった模様であって，使用した活字は刷部数が少なくその磨耗がわずかであれば，解版後，再度活字箱に戻す作業が行われていた蓋然性が高いという想定が，マイザーの推定の背後に前提されているものと思われる。

印刷の前後関係は，heraufと正しく印刷されている刊本が先であり，herausと誤植が生じている刊本が後であるという一見したところでは大変奇妙な順序となる[28]。

5．印刷順の想定－本文の２つの誤植・表紙意匠・扉の罫線の有無を手がかりに－

すでに確認したとおりノンブル17であるべき箇所に誤植23のある異本が初刷と見てよい。したがって，その第２折りを包む表紙１が，表紙２および表紙３に先立つことも明らかである。また，その第２折りとともに表紙１に包まれるherauf beschworと正しく植字されている第１折りの方が，heraus ...という誤植のある折りに先立つことが分かる。

したがって，ノンブルに誤植のある初刷の刊本に続くものは，表紙１のタイプで第１折り第６ページ最終行が悪活字とはいえ正しくheraufと印刷されている刊本であり[29]，さらにそれに続く刊本はなお表紙１のタイプではあるものの，herausと誤植が生じている刊本である，ということになる。

herausの誤植が生じている刊本は，表紙１に包まれるだけではなく，表紙２から表紙３に至るまでいずれの表紙のタイプにも第１折りとして含まれている。それらの印刷の前後はどのようになるのであろうか。

表紙２と表紙３との前後関係は，表紙の意匠の相違について見れば，表紙１と表紙２とが飾り枠の垂直の縁飾り数において１つ後者が増しているだけであって，それ以外のほとんどが同一であることを重視すれば，表紙２が表紙３に先立つと見るのが妥当であろう。

つぎに，飾り枠の角数が３つになった表紙３には，扉に二箇所の罫線を備えた刊本とそれらを欠く刊本と２種の異本があった。これらの前後はどうであろうか。

表紙１から表紙２までの扉にはいずれも二箇所に区切りの線が存在していたことを考慮に入れれば，表紙３をもつ刊本においても，第１折りの第１ページである扉の罫線を二箇所とも備えている刊本が，いずれの線をも欠く刊本に先立つと見るのが妥当であろう。

本来このような印刷順序についての考慮をも背後に備えて，先に〔23ページ本印刷異本対照表（その１）〕で示したようなマイザーやクチンスキーの異本の分類番号ないしは記号が与えられたものと思われる。ここまでの検討も，異本２と異本３の前後関係の吟味は未了ではあるものの，基本的には異本１から異本７までの分類の妥当性を追認したのみである。

ではこれら従来の印刷異本の分類にはなんら

---

[28] かつて黒滝正昭氏は，別稿で舌足らずにのみ述べられたマイザーの企図（Meiser, Wolfgang: Vorbereitungsarbeiten am Textkomplex „Manifest der Kommunistischen Partei“ für die MEGA. In: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, Nr. 22, Berlin 1987, S. 117-128）に対して，当然生じ得る，「クリームの議論の方が説得的である」というもっともな疑念を呈し，その理由をつぎのように述べた。すなわち，「もしマイザーの言うように，初版の第１刷から第４刷だということであれば，アンドレーアスの報告にあるような不規則な変異（一方で誤植が訂正されているのに，他方で新たな誤植が生ずるなどということ）は起こりようはずがない」（同氏「服部文男氏による新訳『共産党宣言』について」『季刊 科学と思想』77号，新日本出版社，1989年10月，257～259ページ，註（４）），と。本節の３．および４．において紹介したマイザーの詳論において，そのような誤植の訂正と新たな誤植が同時に生ずるゆえんがはじめて一定の論拠をもって説明されることとなったが，それにより，黒滝氏が当初抱かれた疑問は一応氷解することになるのではないかと思われる。

[29] 前掲の〔23ページ本印刷異本対照表（その１）〕にも見られるとおり，この刊本には全角クワタの印刷の汚れ［■］の有無により２種の刊本が含まれるのであるが，その前後については後論する。

か問題はないのであろうか。

Ⅲ　表紙および扉の意匠の相違は何を意味するのか

1．表紙1は二つの罫線の位置と長さを基準に少なくとも3種にさらに細分できる

改めて表紙に目を注げば，そこには新たな相違が見出される。

第一は，表紙の4行目と6行目にある2種の罫線の，とりわけ位置と長さとにである。

マイザーは5つの指標をあげて表紙を3種に分類し，異本1から4では最初の表紙の意匠（前掲，図版1）がそのまま保たれていると見ている。しかしながら，表紙の4行目の双柱ケイと6行目の表ケイの位置と長さに着目すると，表紙の意匠はさらに細分しなければならないことが容易に見てとれる[30]。異本3の表紙は遺憾ながら未見であるが[31]，異本1，異本2および異本4における二種の線の位置および長さはそれぞれに随分と異なっている。

表紙を見た印象で表現すれば，つぎのようになる。すなわち，異本1の4行目の双柱ケイと6行目の表ケイとの関係は，4行目の双柱ケイが左右にずれることなくそのまま垂直に下りてきて，6行目の表ケイとなったという感を受ける（前掲，図版1）。それに対して，異本2の場合，異本1と比べれば随分と長くなった双柱ケイが，左に流されて下りていき，6行目の表ケイとなった，その長さは異本1に比べて双柱ケイほどには長くない，という印象である（図版10）。他方，異本4は，双柱ケイについては異本1と大差ないが，異本2と逆に右にシフトして下りていって，表ケイになったような様子，と表現してよいであろう（図版11）[32]。

そのような相違は印刷時のインクの付き具合でいかようにでもなると見る余地も確かに完全に否定しさることはできないものの，二つの種類の各々の線の太さなどを勘案すれば，それらの相違はなんらかそのような印刷時に生じた偶然的なものではあり得ないことが知れる。

これらの相違を数値で示せば次ページの比較表のとおりである[33]。

誤植等それぞれの印刷の相違がある本文第1折りならびに第2折りに，いわば1対1に対応する形で，それらを包む表紙自体の罫線の意匠にも，このように少なくとも3種類の異なる印刷上の相違があることになる。

---

[30] ここでの検討は以下の原刊本ならびにリプリント，ファクシミリ，フォトコピーによった（番号は前掲脚注17のそれである）。異本1：1），2）および2）のリプリント（Trier 1998），異本2：Schottenloher, Karl: *Flugblatt und Zeitung. Ein Wegweiser durch das gedruckte Tagesschrifttum*, Berlin 1922, S. 413所収のファクシミリ（なお，このファクシミリが異本2からのものであるとの推定は，K. Schottenloher が原刊本を所蔵する Bayerische Staatsbibliothek の Oberbibliothekar だったとする Kuczynski, S. 82, Anm. 180による。本稿ではさしあたりこの推定を踏襲せざるを得ない），異本3：表紙は未見（IISG の当該刊本は表紙を欠く），異本4：4）および4）の表紙のリプリント（Karl Marx / Friedrich Engels: *Das Kommunistische Manifest*. Neu eingeleitet von Hermann Weber, Hannover 1966）。

[31] 伝承の知られている異本3の刊本は3部にとどまり，さらにそれらのうち表紙を保っているのは，唯一インディアナ大学リリー・ライブラリー蔵本のみであって，その表紙を実際に検分，調査した研究者はまだいない［Meiser 1991, S. 119; Kuczynski, S. 83. なお，クチンスキーは照会調査のみ実施の模様］。

[32] 図版10：Schottenloher, *ibid*., S. 413, Faksimile. 図版11：Nachdruck, Hannover 1966.

[33] 各罫線の位置および長さの測定はつぎのように行い，得られた数値を表示した。すなわち，3行目の Kommunistischen Partei. の行頭 K の左端から垂線を下ろし，その4行目および6行目それぞれの足を各行の0座標とし，そこから各罫線の始点および終点までの距離を計測，それらの値，またその差を記載した。なお，異本2の場合は，原寸に合わせるためファクシミリでの測定値を1.17倍してある。

〔表紙４行目の双柱ケイと６行目の表ケイの位置および長さの比較〕

	異本１	異本２	異本３	異本４
双柱ケイの位置	30mm～60.5mm	27mm～65mm	未見	30mm～60mm
長さ	30.5mm	37mm		30mm
表ケイの位置	29mm～62mm	25mm～59mm		32mm～62.5mm
長さ	33mm	34mm		30.5mm

この事実は，異本１から異本４までの表紙を同一のものと理解したままでいる場合に生じかねない，異本１の第２折りの誤植，異本２の第２折りの印刷の汚れ，異本３の第１折りの悪活字がそれぞれ気付かれた都度すぐに訂正され，各々一つの異本をなすとはいえ，印刷部数は各々それほどの分量ではなく，同じ意匠の表紙をもつ異本１から異本４までをひと括りにして一つの刷と捉えるべきではないか，といったあり得る見方の根拠を根底から覆すことになる。無論，クリームの二重印刷の見解はほとんど成立し難くなるであろう。

２．異本６の表紙も少なくとも２種ある？

第二に，かつてアンドレアスによって初刷とみなされ，その後この間マイザーおよびクチンスキーによって印刷異本６と分類されている刊本類の表紙にも，詳細に見れば少なくとも２つの種類のある可能性が生じてくるように思われる。

第一の種類はアンドレアスの書誌の巻末に収載されたリプリントに見出されるものである（**図版12**）。この表紙の飾り枠の図柄は，これ以外の異本６の表紙（**図版13**）や異本７の表紙とは随分と異なっている。ことに四隅にある角型のヤクモノの形であって，６点ほどの相違がある[34]。

第一は，左上に着目すると，３つの角型のヤクモノがあるわけだが，３つのうち下部に位置する（左辺に属する）ヤクモノの内側にも，左辺のそれ以下の縁飾りのヤクモノの内側にあるのと同じような縦線（棒）状のヤクモノが付されている。このような縦線（棒）状のヤクモノはその他の刊本には欠けている（図版12・13左上隅）。

第二に，これにともなって，左上３つの角型のヤクモノのうち下部に位置（左辺に属）するヤクモノの右上頂点には自ずと黒い点が欠けることとなる（同）。

第三は，左下の３つの飾り枠のヤクモノであって，そのうち中央のヤクモノの右上頂点（内側）に黒い点がある。その他の刊本の表紙にはこの黒点を欠く（図版12・13左下隅）。

第四は，この表紙においては，その他の刊本において見出されるそのすぐ右側の縁飾りのヤクモノ内の白い点が見られない（同）。

第五は，右下の３つの角型のヤクモノであって，左側の角型と中央（右側）の角型との間が

[34] 図版12：Andréas, *ibid.*, Reprint．図版13：*Die Gemeinschaftsarbeiten von Marx und Engels. Eine Sammlung von Originalausgaben*. Wissenschaftliches Antiquariat Auermann & Ress KG (Glashütten/TS.) Antiquariat und Verlag Georg Sauer (Königstein im Taunus) o. J., S. 15, Faksimile．図版13が異本６に属するとの判断は Meiser 1991, Anm. 34に基づく。なお，図版12および図版13に関わる罫線の長さの測定にさいしては，原刊本からの拡大・縮小を考慮し，前者については0.86倍，後者については1.01倍してある。

Manifest

der

Kommunistischen Partei.

Veröffentlicht im Februar 1848.

Proletarier aller Länder vereinigt Euch!

London.
Gedruckt in der Office der „Bildungs-Gesellschaft für Arbeiter"
von J. E. Burghard.
46, Liverpool Street, Bishopsgate.

図版10

Manifest

der

Kommunistischen Partei.

Veröffentlicht im Februar 1848.

Proletarier aller Länder vereinigt Euch!

London.

Gedruckt in der Office der „Bildungs-Gesellschaft für Arbeiter"
von J. E. Burghard.

46, Liverpool Street, Bishopsgate.

図版11

Manifest

der

Kommunistischen Partei.

Veröffentlicht im Februar 1848.

Proletarier aller Länder vereinigt Euch!

London.
Gedruckt in der Office der „Bildungs-Gesellschaft für Arbeiter"
von J. E. Burghard.
46, Liverpool Street, Bishopsgate.

図版12

Manifest

der

Kommunistischen Partei.

Veröffentlicht im Februar 1848.

Proletarier aller Länder vereinigt Euch!

London.
Gedruckt in der Office der „Bildungs-Gesellschaft für Arbeiter"
von J. E. Burghard.
46, Liverpool Street, Bishopsgate.

図版13

他の表紙と比べると開き気味であるのにもかかわらず，それぞれの角型の先端にある黒い点が接近し過ぎており，１本の横線にさえ見えるほどである（図版12・13右下隅）。

第六は，右上の３つの角型のヤクモノである。３つの角型の内側先端には各々小さな四分円(90度の扇型）の空白箇所があって，そのなかにそれぞれ１個の黒い点が置かれるはずである。が，この表紙では右上（中央）の角型の内側先端に四分円がつくられず，そのためそこに入るべきであった黒い点がさらに内側にせり出す形で印刷されている（図版12・13右上隅）。

このような相違は，刷りの圧力等，印刷時の諸事情だけによっては説明されないものである。アンドレアスによるリプリントのオリジナルがどの刊本であったのかが明らかでないだけに，復刻するさいの「修正」ということも想定されなければならないが，両者の相違点は以上の確認のとおり少なからぬ数であるだけに，相違の原因を復刻時の修正にのみ求めるのも少なからぬ無理があるように思われる。

以上のような相違の指摘が妥当であるとすれば，これまで異本６として一括されていた版本は少なくとも２つの別の種類の表紙をもつ異本６－１と異本６－２とに二分されなければならないということになろう[35]。

３．異本２と異本３との関係
－18ページ33行目行頭のクワタ痕－

前項までのように表紙や異本が細分される面もあるが，他面で，これまで分けられていた異本がまとめられる可能性もあるように思われる。これまで異本２と異本３との前後関係の判断を留保してきたのはそのためであって，以下その事情を記す。

この前後を見るには，両者を画する相違である⑨の特徴（全角クワタの汚れ［■］の有無）が，刷の相違を現す表紙の相違にまで関係するものであったのかどうかを見極めなければならない。異本３の表紙の検討はまだなされていないだけに，もしその表紙が，特に２種の罫線の位置と長さとが，異本２と同じであれば，両異本を別の刷とまで見ることには無理が生じよう。そして，その場合には，原版刷りにさいしての込め物の偶然的なずれといった解釈をとることが可能となり，両異本間の印刷の前後関係を問うことはきわめて困難になるであろう。

逆に，両異本の表紙が各々異なった罫線の意匠となっていれば，クワタの汚れ痕の有無に対応して２つの刷が生じているとみなすことができよう。そして，こうした込め物による印刷の汚れが除去されている方が印刷の不備が少ないと見てよいのであって，二つの刊本内の先後は，クワタの汚れのある刊本→それが除かれている刊本，と見るのが妥当となろう。

４．表紙および扉における意匠の相違はなぜ生じたのか－刷の相違を示す目印－

このように異本２と異本３とがまとめられる可能性が残存しはするものの，総じて23ページ

[35] もしそうであるとするならば，クチンスキーがアンドレアスの書誌巻末リプリントのオリジナルをB6c)，すなわち図版12に求めている推測（Kuczynski 1995, S. 86）は成立し難いこととなる。その他の各種書籍における23ページ本の複製においてもアンドレアスの複製と同様の意匠のものが散見されるが，それらの典拠はまったく明記されていないのであって，結局はアンドレアスの複製を踏襲したものが多数なのかもしれない。
なお，この項は前掲拙稿「『共産党宣言』23ページ本の表紙・各ページの複製について」Ⅱにおいて先に公にした。

本の表紙等の意匠の相違は従来の把握よりもずっと多いのではないかと推測される。では，このような表紙等のデザインの差異はどのような意味をもつのであろうか。

マイザーは『宣言』の印刷場所に関する彼の見方を示しつつ，つぎのように述べていた。

「『宣言』の初版が若干の刷で，一週間おきないしは数週間おきに，『ドイツ語ロンドン新聞』を発行する印刷の合間に印刷されたということは，もっともであるように思われるばかりでなく，それを肯定する状況証拠もまた存在する。一つは，表紙のさまざまな形をした縁飾りならびに異なった扉を伝える諸刊本，すなわち，19世紀における部分増刷（Teilauflage）（扉増刷（Titelauflage））の区別の通常のやり方である」[36]。

『宣言』の印刷が実は当時の『ドイツ語ロンドン新聞』の印刷所でなされたとするマイザーの見解についてはまた別の検討を要する[37]。ここで重要なのは，表紙や扉の図柄の相違は19世紀において諸増刷を区別する一般的な手法であったとしている点である。

そうであるとすれば，つぎのような推定はかなり高い確度をもつものであろう。すなわち，マイザーやクチンスキーによっても同じ意匠と考えられていた異本１から異本４の表紙にも実は上に見たような明瞭な相違のあることが分かれば，異本５や異本６および異本７のような表紙の意匠が現われる理由も自ずと明らかになる。表紙４行目の双柱ケイと６行目の表ケイの位置および長さの変化だけでは，表紙の相違を一見して示す手段はもはや失われ，飾り枠のうち垂直の縁飾りの数を増やすといった変化や，飾り枠の隅の角数を増やすといったより大きな図柄の変化をつけるしかなくなったのではなかろうか。さらに，表紙６を細分したさいに見たように，四隅の角周囲の小さな意匠の変化に求めてもそれには自ずと限界がある。そのような表紙部分の相違だけではもはや足りず，第１折りの最初のページである扉に変化を求めることを余儀なくされ，扉の４行目の双柱ケイと６行目の表ケイの双方とも取り去る異本７のような意匠が現われる。そして，これは別に論ずるべきであるが，扉の４行目の双柱ケイだけを取り去り，６行目の表ケイは残すというアンドレアスの1Dあるいはクチンスキーの刷X（Druck X）のような変化を生む可能性も生じてくるのかもしれない。

実際，マイザーの言うように，表紙の意匠が相違するのは極めて意識的なものであって，19世紀において増刷（重版）を区別する一般的な手法としてここでも用いられ，特に異本１から異本２・３および異本４という仮綴じ本個々の刷の相違を明示する手段だったと見てよいのではなかろうか[38]。

つまり，異本１から異本４までの表紙を同じ図柄の表紙１をもつ一つの同じ刷としてまとめてしまうことはできず，異本２と異本３の関係はいま措くとして，各異本は個々に独立の一つの刷をなすものと捉えるべきであろう。また，

[36] Meiser 1996, S. 98（拙訳，37ページ）．Teilauflage および Titelauflage の語は，前者が各折りの印刷異本を生む増刷，後者が表紙ないしは扉の印刷異本に帰する増刷を意味するものと思われるが，便宜的に「部分増刷」および「扉増刷」とした。

[37] さしあたり，拙稿「『共産党宣言』はいつどこで印刷されたのか」『経済』第82号（2002年7月）110～129ページを参照。

[38] 先に脚注４で述べた本稿における刷の理解とは，このような当時の印刷慣行に沿ったものである。

23ページ本印刷異本対照表（その２）

印刷異本			異本1	異本２	異本３	異本４	異本５	異本６－１	異本６－２	異本７	類型数	
識別の指標 ＼ 依拠資料			Amsterdam-Uni. Basel-Uni.	K. Schottenloher (Faksimile)	IISG Ex.1	IISG Ex.2	SAPMO	Andréas (Reprint)	РГАСПИ (RC); GAvME(F)	Neue Gesell-schaft(Reprint)	部分	全体
表紙	飾り枠隅の角数		1	1	1	1	1	3	3	3	2	5～6
	左下隅端点		無し	無し	無し	無し	有り	無し	無し	無し	2	
	縁飾り数	水平	16	16	16	16	16	13	13	13	2	
		垂直	29	29	29	29	30	26	26	26	3	
	白点の場所		水平下左から4	無し	水平下左から4	水平下左から４	水平上左から３	無し	水平下左から１	水平下左から１	3～4	
	双柱ケイ	位置	30mm～60.5mm	27mm～65mm	未見	30mm～60mm	33mm～59mm	31mm～60mm	30mm～60mm	31mm～61mm	3	
		長さ	30.5mm	37mm		30mm	26mm	29mm	30mm	30mm		
	表ケイ	位置	29mm～62mm	25mm～59mm	未見	32mm～62.5mm	29mm～59mm	28.5mm～60mm	28mm～60mm	28.5mm～60mm	3	
		長さ	33mm	34mm		30.5mm	30mm	31.5mm	32mm	31.5mm		
第1折り 扉	双柱ケイ	位置	36mm～66mm	未見	36mm～66mm	36mm～66mm	36mm～66mm	36mm～66mm	36mm～66mm	無し	2	3
		長さ	30mm		30mm	30mm	30mm	30mm	30mm			
	表ケイ	位置	33mm～64.5mm	未見	33.5mm～65mm	33mm～65mm	33mm～64mm	32.5mm～63mm	33.5mm～65mm	無し	2	
		長さ	31.5mm		31.5mm	32mm	31mm	30.5mm	31.5mm			
第1折り 本文誤植	S. 6, Z.53 heraus		無し，但し損傷	無し，但し損傷	無し，但し損傷	有り	有り	有り	有り	有り	2	
第2折り 本文誤植	S.17→S.23		有り	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	2	3
	S.18, Z.33■		無し	有り	無し	無し	無し	無し	無し	無し	2	
	S.23, Z.44Lander		有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有りReprint訂正	1	
	S.23, 双柱ケイ			未見	右に1mm長						1～2	
伝承刊本26（a+b+c=7）			3	1	1＋(2)	2＋(a)	4＋(b)		4＋(c)	2		7種

1）網掛け部は各印刷異本に特徴的な識別の指標を示す。
2）異本２と異本３の欄のぼかした字による記載は，筆者がなんらの典拠資料にも当たることができず，従来説をそのまま記載していることを示す。
3）表紙の白点の場所につき，類型数で３～４としてあるのは，異本２のファクシミリには白点が見出されないためである。
4）S.23, Z. 44. Lander を出してあるのは，今後の Andréas 1D, Kuczynski Druck X の検討を考慮したため。
5）S.23の双柱ケイは異本３を差別化し得るか否かで，類型数が変わるため１～２としてある。

異本６も細分された少なくとも２つの刷があると見る必要があるのかもしれない。

最後に，先に掲げた従来の知見にのみ基づく〔23ページ本印刷異本対照表（その１）〕に，23ページ本の構成，表紙の罫線の相違等，本稿で得られた新たな知見を加えて改めて対照表を作成してみれば，**〔23ページ本印刷異本対照表（その２）〕**のとおりとなる。

おわりに

本稿での検討の結果と今後検討すべき課題を記し，まとめとする。

第一。近年，マイザーらによって23ページ本各印刷異本の分類がなされたが，第Ⅰ節ではそのさいの諸指標を整理し取りまとめた。

第二。従来の諸見解では各異本の印刷順序は分類番号のうちに暗黙に示されるだけで，異本を分つ諸指標がどのようにして印刷順序を示す論拠とされるのかについては明瞭には示されていなかった。これに対して，第Ⅱ節では，その背景に窺われる論拠を取り出してはっきりと提示することに努めた。

第三。その作業のなかで，23ページ本の初刷は17ページのノンブルに誤って23と打たれた刊本であるとのマイザーやクチンスキーの推定を検討し，その推定の蓋然性が極めて高いことを追認した（第Ⅱ節）。

第四。本稿では，その刊本が単に最初に印刷された異本であるとの従来説の確認に止まらず，この刊本が一定の印刷部数をもつ特定の表紙の宛てられた，文字どおり第１刷（初刷）と称してよい可能性のあることを説いた（第Ⅲ節）。

第五。その展開のさいに論拠としたのは，まず，前提として，23ページ本は表紙，第１折りおよび第２折りの三つの部分からなるということの確認（第Ⅱ節）であり，さらに，そのうちの表紙部分について，従来は同一の意匠とみなされていた23ページ本の表紙１を特にその２種類の罫線について精査し，表紙１は少なくとも三つの種類に細分されるという新たな事実の検出であった。そして，異本６にも少なくとも２種類の表紙の図案があり得る可能性を提起した（第Ⅲ節）。

ここから自ずと以下の検討課題が与えられる。

第一。『共産党宣言』23ページ本が表紙や扉の多様な意匠によっても示される多くの刷をもつとすれば，それはいかなる意味をもつのかについてのさらなる検討である。これは23ページ本がどこでどのように印刷されたのかという問題の詳細に立ち入ることともなる。そのさいマイザーの推定の吟味は不可欠であり，具体的には『宣言』の『ドイツ語ロンドン新聞』への再録とも関わって，同紙の編集・印刷の実際が問われなければならないであろう。

第二。23ページ本原刊本個々の伝承の吟味であって，それらが各異本の刷の順序の確定に資するか否かを検討する必要がある。

（2004年2月22日 脱稿，7月20日 補訂）

〔付記〕本稿は2003年度および2004年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究課題名「『共産党宣言』初版の出版史・影響史についての研究」（課題番号15530131）の研究成果の一部である。

また，慶應大学蔵本についての言及は校正時（11月）の補足である。